読者参加G（ゲーム）ノベル

爆れつハンター Special

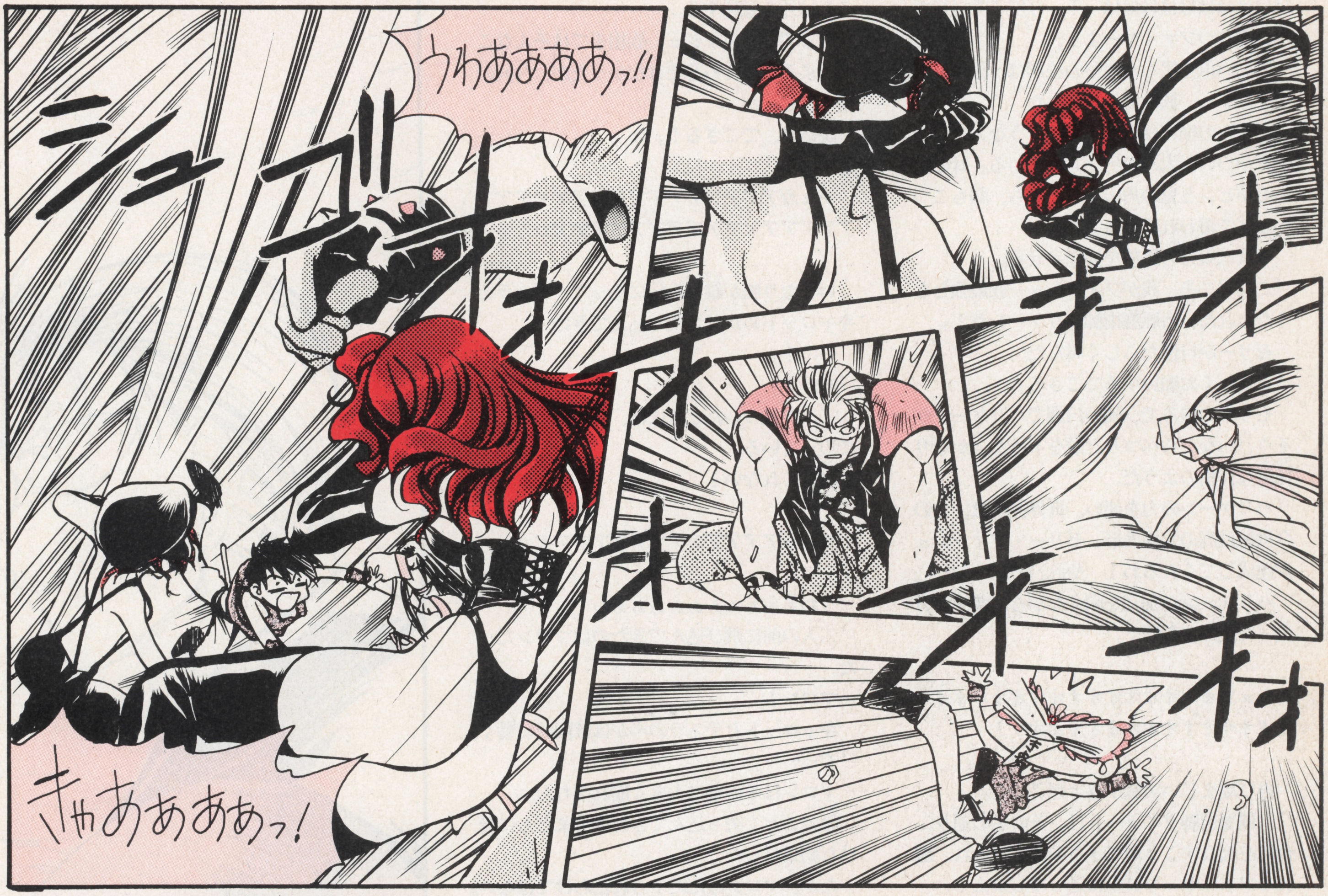
第7話 愛の嵐の前ぶれ!?



見つめる先にはキミの笑顔…そして…

あかほりさとる

イラスト／臣士れい



1

シュゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

「うわぁっ！」
「ちぃっ！」
「くっ！」
「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！」
「のわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！」
凄まじい突風が爆れつファイヤーの面々を襲った。

ティラとショコラは鞭や針金を使って、建物などに身体を固定する。
ガトーは両手を大地に突っ込んで、身体を支えた。
マロンは護符を使い、その風をシールドする。
「のわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあっ！」

ドカッ！

「ぐえっ……」
なにもしなかったキャロットだけが吹き飛ばされ、背後の建物の壁にめり込んだ。

「兄さん！」
「ダーリン！」
マロンとショコラが慌ててキャロットのもとに駆け寄る。
が、いつもなら真っ先に駆け寄るはずのティラの動きは少し遅れた。
「あ……キャロ！」
前回のことが尾を引いているのだ。
あのエンゼルの衝撃的な告白が。
戦闘中だというのに、ティラの心の片隅からそのことが離れなかった。
そう、今は戦闘中だ──
「ふはははははははははははははははははは

前回までのあらすじ

魔法を使えるひと握りの法族（ソーサラー）の圧制に苦しむ庶民（パーソナー）。その力を持たぬ彼らに代わって、非道な法族を、始末する謎の仕事人たち。それが法族狩り（ソーサラーハンター）だ。キャロット、そしてティラたち5人は、ある日法族狩りの元締め、ビッグマムの命によりファザードの小悪党、フィッシュ一族にもお灸を据えることとなる。制服マニアにして世界征服の野望をたくらむ（笑）フィッシュ公爵の放つ怪人との、どたばたギャグバトルをくり返しながら、毎月帝都を爆笑に引き込むキャロたち爆れつハンター五人。ところがある日、ティラの前にエンゼルという若者が現れる。泥棒の濡れ衣を着せてしまうという出会いの割には、急速に接近していくふたり。が、エンゼルは実はフィッシュ一族のひとりだったのだ。しかしエンゼル自身はフィッシュ家から離れんとしており、またティラもエンゼルの身元には気づいていない。ところがある日、プールの更衣室で抱き合うふたりを、キャロが目撃してしまう。実際には偶然のしわざだったのだが、キャロは誤解し不機嫌になる。なんとか誤解を解きたいティラ。だが、そんな中キャロとエンゼルが思わぬことで殴り合ってしまい、エンゼルから「ティラは俺がもらう！」の言葉が!!　はたして…!?

ははははははははははっ！　今度こそ最後だな、爆れつファイヤーよ！」
甲高い声で笑った金髪の美形は、誰あろう、フィッシュ一族のゼリーだった。
ゼリーの横には、サンタのような大きな布袋をかついだ太めの男が立っている。耳の上の毛がピンと鬼の角のように立ち、顔もごついヒゲで覆われている。
それは東方の風神を連想させる。
「この男こそ、我がフィッシュ一族最強ともうたわれた、台風魔術師ハリケーンだ！」
ゼリーが自慢たらしく叫んだ。
「よろしくお願いするでござる」
ゼリーの後ろで、硬い口調でハリケーンがそう言いながらペコリと頭を下げた。かなり律儀な性格のようだ。
「ハリケーンの力を使い、世界征服は、この今世紀最高の究極美形、ゼリー・フィッシュが達成してくれるわ！　やれ、ハリケーン！」
ハリケーンが呪文を唱えながら、背中に背負った袋の口を開く。

シュゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

再び凄まじい突風が巻き起こった。
「台風魔術師タイフーンは、その名の通り、台風を起こすことができるのだ！　それ、爆れつファイヤーを冥土に送ってしまえ！」
ゼリーの声とともに風速がますます強くなる。

シュゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

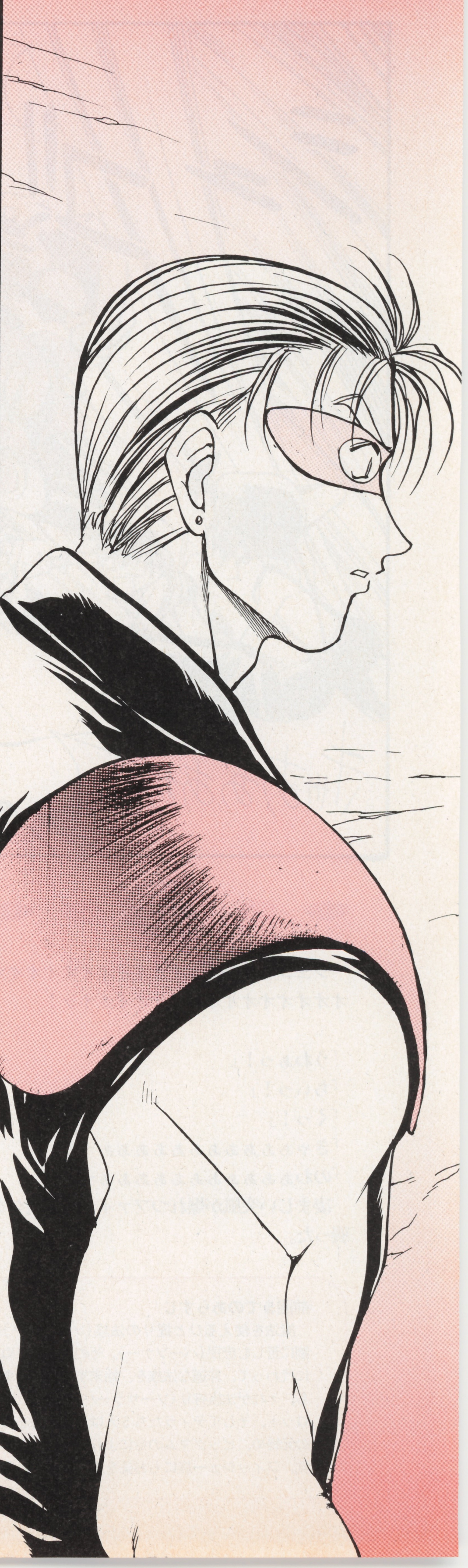
「こら〜、なんとかしろ、マロン！　ショコラ！　ガトー！　ティ……」
壁にめり込んだままわめいていたキャロットだが、ティラの名を言おうとしてつかえてしまう。
彼の頭の中にもあのエンゼルとのことがしっかりこびりついていたのだ。
「ティ……ラ……」
「…………」
風の中でティラとキャロは見つめ合った。
なにか言いたいのだが言えない、わだかまりのようなものがお互いにある。
が、いくらフィッシュ一族相手とはいえ、戦いの場での余計なことに気をとられていることは死を意味する。
今までのフィッシュ一族相手ではそんなことはまるで考える必要はなかったが、今回の相手は違った。
「隙あり、でござる！」

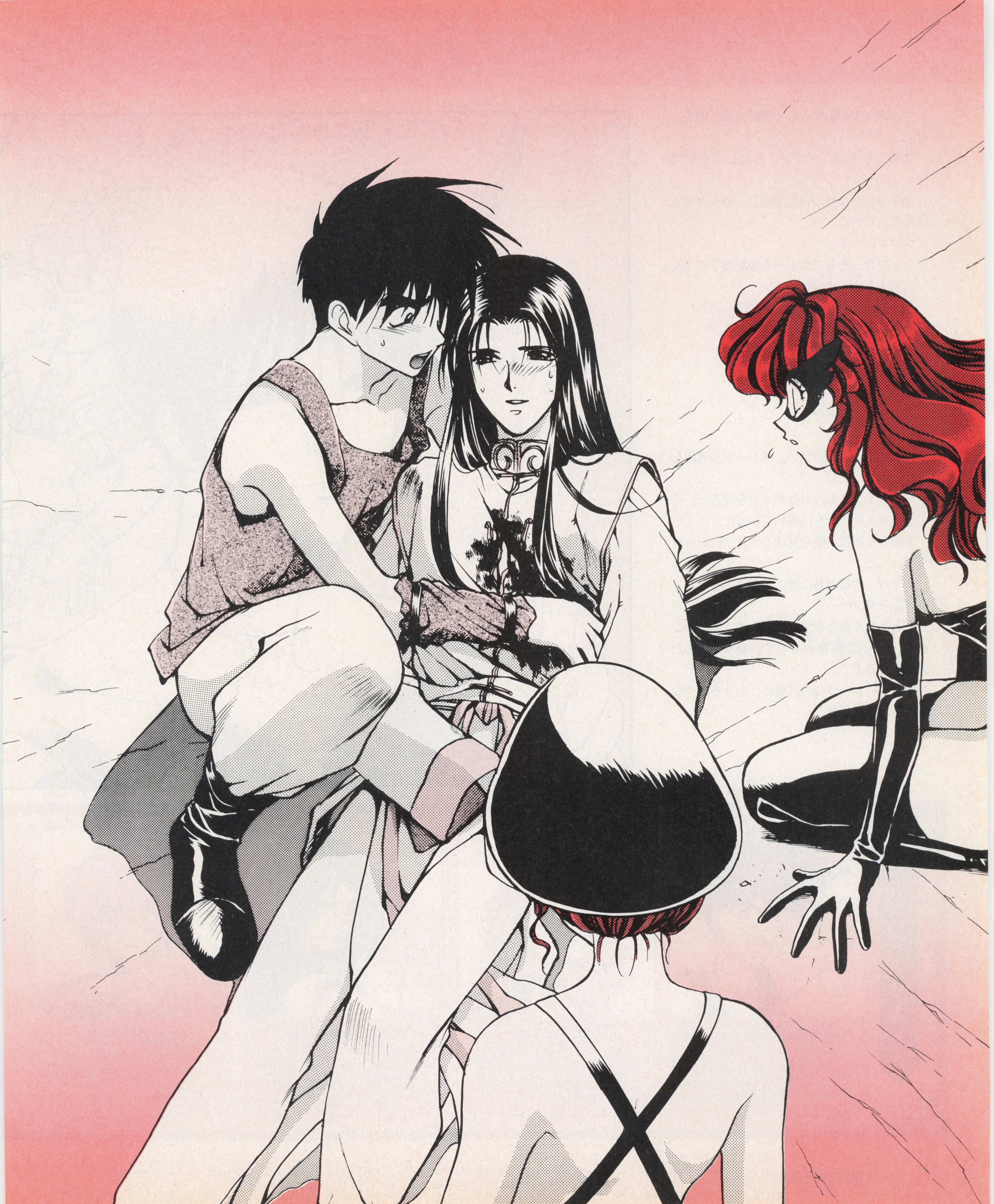
シュガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！

いきなり風が錐もみ状になって、ティラとキャロットめがけて突っ込んできた。
「……！」
「あっ！」
二人が気づいたときには、もう風は眼前まで迫っている。
よけられない！

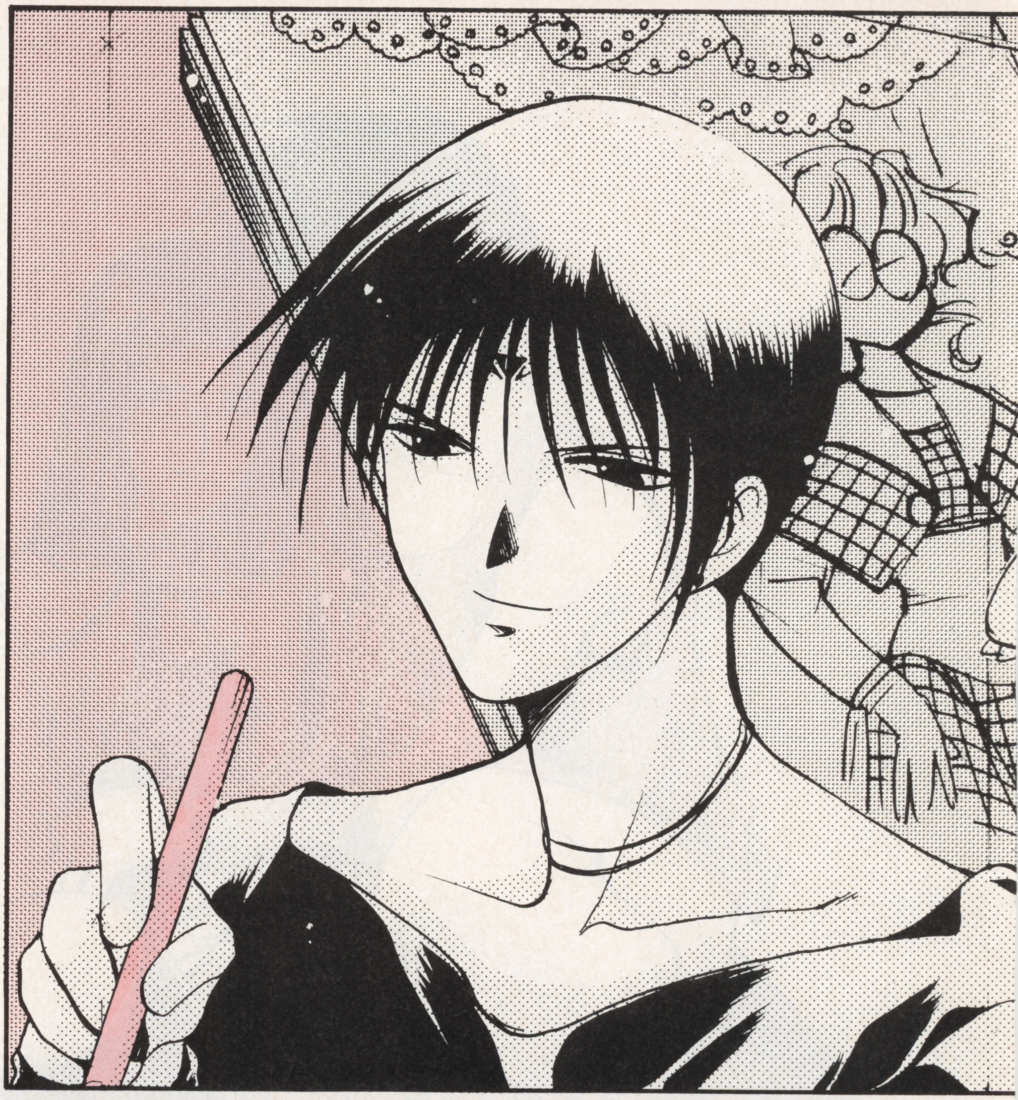
ズシャアアアアアアアアアアアアッ！

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
二人の前に飛び込んできたのはマロンだった。
「マロン！」
キャロットとティラの声がほぼ同時に響く。
「ぐっ……」
マロンはその場に大きく崩れ落ちた。
錐のごとく突っ込んできた風をまともに受けた結果だった。
だが、マロンはただやられたわけではない。
「な、なんと！」
ハリケーンが驚きの声をあげていた。
錐もみ状の殺人風を受ける瞬間、勝利を確信し、油断した相手の一瞬の隙をついて、マロンの護符がハリケーンの風袋に飛び込んでいた。
護符は袋の中で朱雀へと変じ、袋を燃え上がらせていた。
「み、見事でござる！」
ハリケーンは素直に感心していた。
焦ったのはゼリーだった。
「い、いかん！　風が使えないのではハリケーンもただの人……ここは撤退だ！」
ゼリーはなかばハリケーンを引っ張るように、慌てふためいて逃げていった。
逃げていくゼリーたちを追おうともせず、全員がマロンのまわりに集まっていた。
胸から脇腹にかけて大きく切り裂かれ、マロンは重傷であった。
「すまん、マロン」

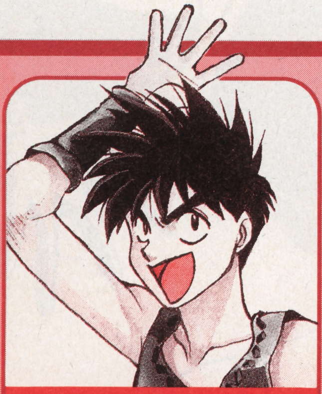




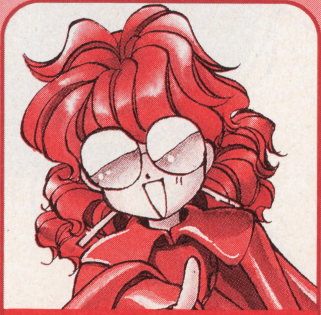
キャロットがめずらしく神妙な顔で頭を下げた。
「ごめんなさい、マロン、あたしのせいで……」
ティラもかなりの責任を感じ、ガックリとうなだれている。
「マロン……！」
ショコラ、そしてガトーも心配そうだった。
「大丈夫だよ、ボクは……」
荒い息でマロンはニッコリ微笑んだ。
そのままキャロットのほうを見る。
「兄さんたちにケガは……？」
「マロン、いいから喋るな！」
「兄さん……」
「ガトー、マロンを」
「ああ」
慎重にマロンを背負い、ガトーが歩き出した。
キャロットはちらっとティラを見ると、そのままガトーとともに歩いていった。
呆然(ぼうぜん)とその後ろ姿を見送るティラにショコラが言った。
「ティラ、今日のあんた、変だよ」
「オネーサマ……」
「たとえどんなときでも気を抜けば死につながる。……法族狩り(ソーサラーハンター)としての基本をあんたは忘れてるよ！」
きびしいショコラの言葉に、ティラはうなだれるのみだった。



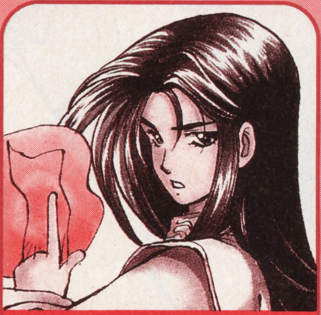
ハンターリスト



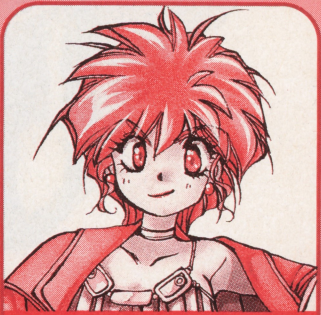
キャロット=グラッセ
爆れつハンターのリーダーながら、その性格はご存じの通りスケベでノー天気で超お調子者。魔法を受けると牛魔獣など獣人化する。



ティラ=ミス
慈愛に満ちた眼差しが、封印を解かれたとたん、恐怖のSM女王の眼光に変わる。キャロットに密かに恋心を持っている。

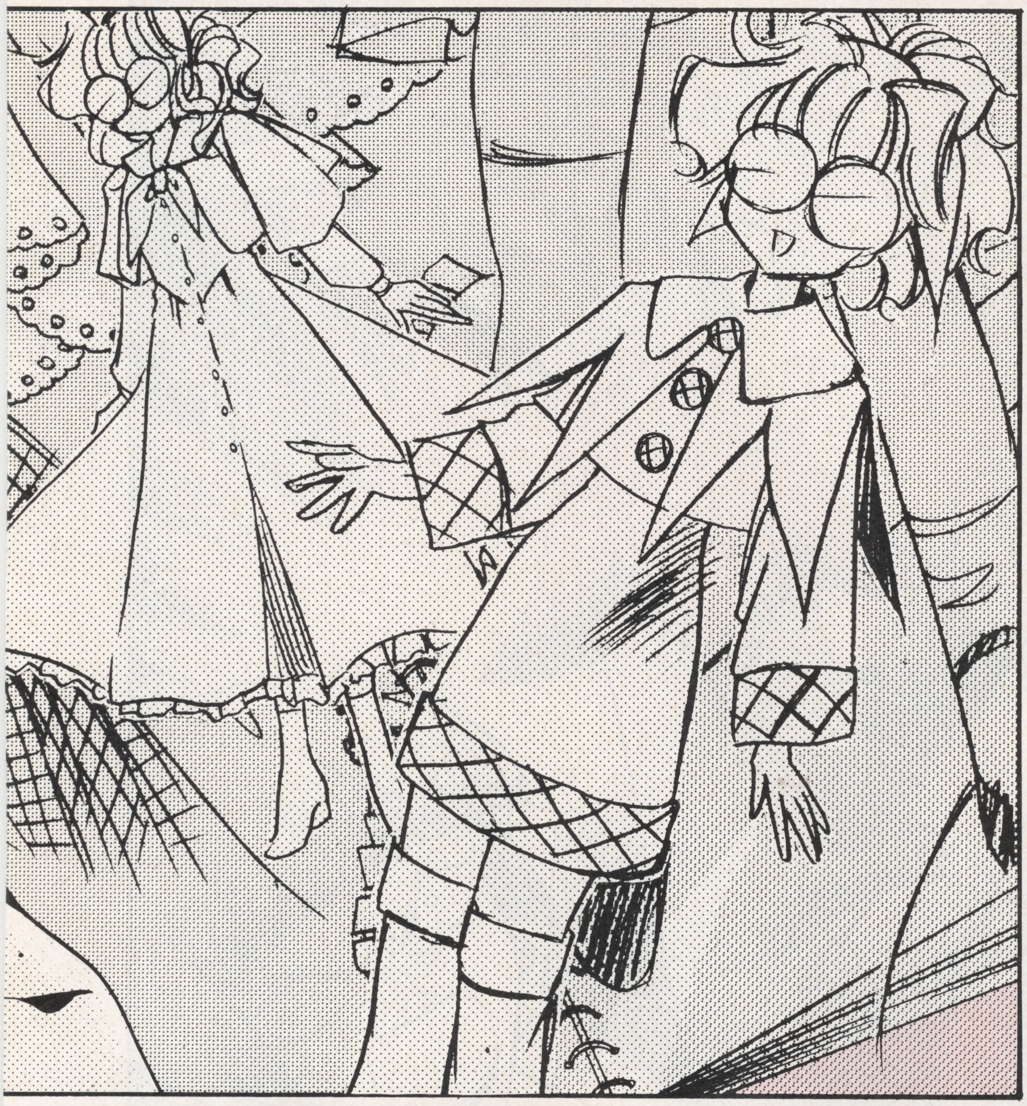


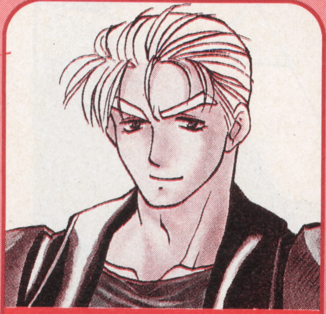
マロン=グラッセ
東方魔術の達人にして冷静沈着、兄のキャロットとは正反対の性格である。だが、実は強度のブラザーコンプレックスでもある。



ショコラ=ミス
好きな男には一直線！　妹のティラとはこちらも正反対の性格。しかしSM女王様化した後の怖さは、まさに姉妹！　の恐ろしさ。

爆れつ場外乱暴!!
すわぁて！　今月もサクサクといってみようか。まず最初は福岡県・さるるの作品から。「“寝ゲロはたちが悪いからみんなねげろー” “ニンニクが好物だなんてニンニクイぞ！” “なにー、この便器まだペンキ塗りたてだったのかよー”」　苦しいネタも三度までってもんだ（意味不明）。





ガトー＝モカ

美に対する執着は、まさに病的。おのが肉体にもそれを求め、結果的に、物理攻撃としては究極の肉体を手に入れた法族狩り。

2

机に向かい、エンゼルはひたすらデザイン画を描き続けていた。

ここはエンゼルの部屋だ。

あの服飾デザインの学校からさほど遠くないところにエンゼルは部屋を借りて一人暮らしをしていた。

シャワー付きのわずか一部屋。

ベッドと机を入れたら、もうほとんどなにも置けない、そんな部屋だった。

大法族（ソーサラー）フィッシュ家の御曹司（おんぞうし）には似つかわしくない。

が、エンゼルはそんなことを気にしている様子はまるでなかった。

シャッ……シャッ……

エンゼルのスケッチブックにはみるみるデザイン画ができあがっていく。

服を着たモデルの絵は眼鏡をかけた女の子だった。

「…………」

エンゼルの表情は、日頃見せたことがないようなやさしいそれになっていた。

（ティラにはこんな服も似合うだろうな……）

エンゼルのデザインはその方向で描かれていた。

今までのエンゼルには信じられない考え方だった。

もともとエンゼルはセンスは悪くない。

が、彼の描くデザインは教師のウケが悪かった。

なんというか、冷たいのだ。

人が着たいと思う服ではない——

エンゼルのデザインは常にそう評価されていた。

それでもエンゼルは頑（かたく）なに自分のデザインの方向を変えようとはしなかった。

意地というか、プライドがそうさせるのかもしれない。

既存の権威に対する反発であったかもしれない。

それがティラとの出逢い以来変わった。

「…………」

エンゼルはふとスケッチブックの横を見た。

そこには小さな水晶玉が置かれている。

「…………」

スッとエンゼルはその水晶玉に手をかざした。

ボウッ……

水晶玉がわずかに発光して、光の中に像が現れた。

美しい女性の像だった。

「母さん……」

エンゼルが像を見て、小さい声でつぶやいた。

その像はどこか面影がティラに似ていた。

爆れつ場外乱暴!! さて次、東京都・稲葉輝文の作品。「"顔は魚で心はギョ。ハートなブラはラブラブブラブラ"熱あるみたいで、失礼しました」……既に俺の理解の及ぶところではなくなりつつあるなこのコーナー。ぼちぼち引退か…ってダジャレ程度で進退考えてどうするかねオレも。



3

「世界征服はこの私がやるのだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「お兄様は引っ込んでいて！　私(わたくし)が必ずや達成してみせますわ！」
今日も今日とて、サカナヤ山脈にあるフィッシュ一族の本拠地では二つの怒声がぶつかり合っていた。
ゼリーとオータムだ。
あいもかわらず二人はフィッシュ一族総帥の後継者の地位を巡って争っているのだ。
「ともかく、ハリケーンの風袋が直り次第、私は再び出陣する！」
「いいえ！　逃げ帰ってきたのですから、お兄様の番は終わりですわ！　次は私が……」
「出しゃばるなというのに！」
二人の争っている場所はいつもと同じく公爵の謁見(えつけん)の間。……ということは、いつもだったらこのあたりで公爵の一喝が響き、争いも中断されるはずだった。
が、この日は違った。
争いが始まった直後ぐらいまでは確かに玉座には公爵の姿があったのだが、今はない。
争いを見て、公爵はさっさと外に出てしまったのだ。
そんなことは知らず、ゼリーとオータムはいつまでも怒鳴り合っていた！
「あたしがやるって言ってるだろうが！　このバカアニキ！」
「引っ込んでろ、この化粧ブス！」
……しかし、だんだんとガラが悪くなっていくなぁ、この二人。

「ふぅ〜……」
公爵は大きくタメ息をつきながら中庭に出ていた。
はっきり言って、ゼリーとオータムの二人に幻滅していたのだ。
「ったく、あんな二人に期待せねばならぬとは……我が公爵家の未来は暗い……」
制服マニアの変態だが、意外と公爵は冷静な判断力を持っているらしい。
「変態は余計だ！」
こりゃ、失敬。
中庭は色とりどりの花が植えられ、手入れが行き届いている。
ただし、一カ所を除いて。
公爵が歩いていく先にその一カ所があった。
そこも花壇だが、他とは違って、子供の背丈ぐらいある柵がまわりを囲んでいた。
中庭の一角。
だいたい20歩も歩けば、周囲を回ってしまえるぐらいの広さだ。
柵の中はぼうぼうと雑草が生い茂っていた。
なぜ、こんな花壇があるのか？
「……ん!?」
柵に誰かがもたれかかって中を見つめている。
ソードだった。
誰かが近づいてきたのに気づき、ソードが振り向いた。
「あ、お父様」
公爵はじっとソードを見る。
ソードはどこか寂しそうな表情をしていた。
「どうしたんだ、ソード？」
「えっと……ちょっとエンゼル兄様のことを思い出していたの」
「そうか……」
公爵も花壇の中を見た。
生い茂るにまかせた雑草が公爵の目に飛び込んでくる。
公爵の命により、そこはいかなる人物も触れることは禁じられていた。
許されているのはただ一人――エンゼルだけだ。
「アフロディーテの花壇……さびれたのう」
「エンゼル兄様がいなくなってから、誰も手入れしていないもの。お父様、なぜここ、触っちゃいけないの？　ソード、アフロディーテお母様の花壇、きれいにしたいのに」
「ソード、おまえはアフロディーテにずいぶんとかわいがられたからな。だが……」

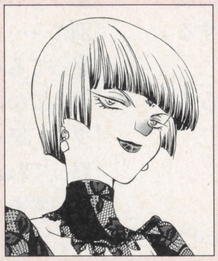
WANTED!

フィレオ=フィッシュ



悪の法族「フィッシュ一族」の総帥。制服マニアが高じて世界征服までもくろむおマヌケなオヤジ。正体、実力のほどはまだ不明。

オータム=フィッシュ



フィッシュ一族の長女。ケバケバな容姿と酷薄な性格はまさに悪の女帝。異母兄のゼリーと、一族の後継者をめぐって対立している。

ソード=フィッシュ



オータムの実妹。コケティッシュな容姿通り小悪魔的な性格。ニコニコとあまり意味もわからないままに、悪の野望の手伝いをする。

ゼリー=フィッシュ

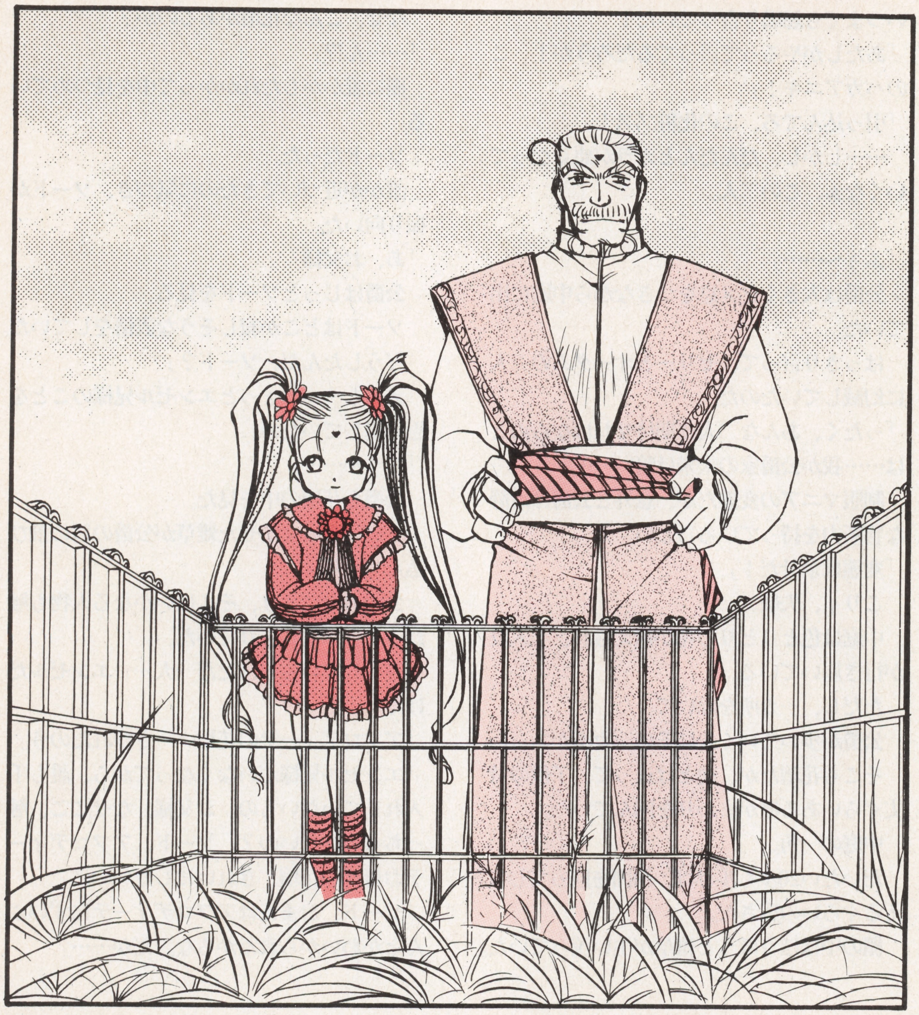


フィッシュ一族の長男。一見オカマ的だが、性格もやっぱり陰険、自分勝手、無責任と三拍子そろった悪役。おマヌケさも父親ゆずり。

エンゼル=フィッシュ



フィッシュ一族の一員ながら兄妹とは一線を画し、ゼリー、オータムとも仲が悪い。その過去、人柄は今のところ謎に包まれている。



公爵はじっと花壇を見て、ポツリとつぶやいた。
「ここはエンゼルしかだめなのだ」
改めて少し説明せねばなるまい。
アフロディーテというのは、エンゼルの母親である。これに対し、ゼリーの母親は違う。さらにはオータムとソードの母親もまた違った。
公爵は三人、夫人を持っていたのだ。
ちなみに、第一夫人がゼリーの母親、第二夫人がオータムとソードの母親。そして、第三夫人がエンゼルの母親のアフロディーテだった。
公爵がソードを見て言った。
「ソードはエンゼルのことが好きか？」
「うん」
「そうか……。わしも好きなんだがなぁ……」
二人はしばらくの間、草ぼうぼうの花壇を見つめ続けていた。

4

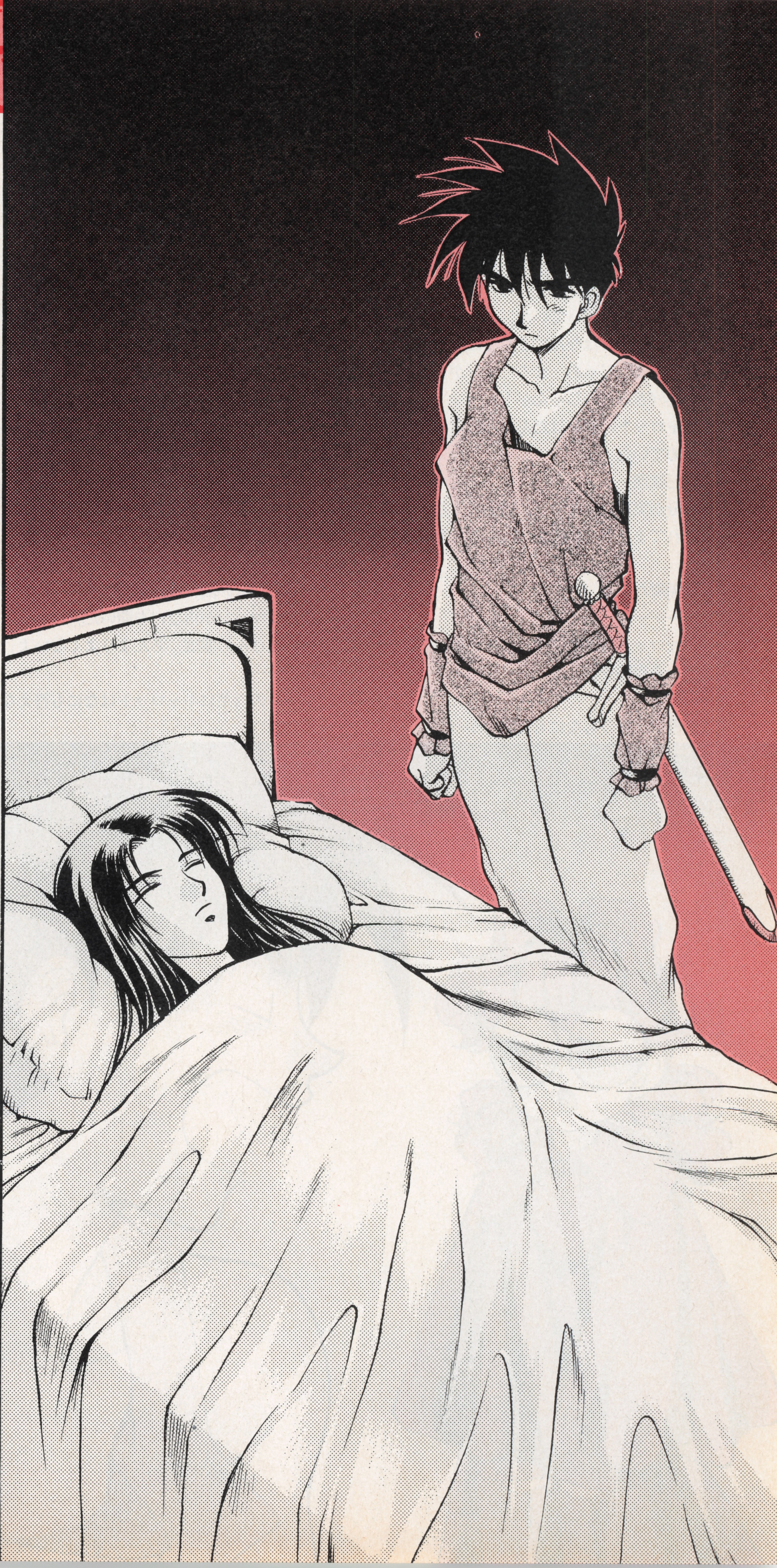
幸いなことに、マロンは命に別状はなかった。
ビッグ・マムの〝聖母(セイント・マム)〟としての治癒能力を使っても、すぐに完全に傷が再生するわけではない。
「いい機会です。マロン、あなたはしばらく休むといいでしょう」
「しかし……」
「これは命令です」
マムに言われ、マロンは部屋で床についていた。
責任を感じているのか、横にキャロットがついて、静かに眠っているマロンを見つめていた。
「すまねえ、マロン……」
ほとんど消え入るような声でキャロットはつぶやいた。

トントン……

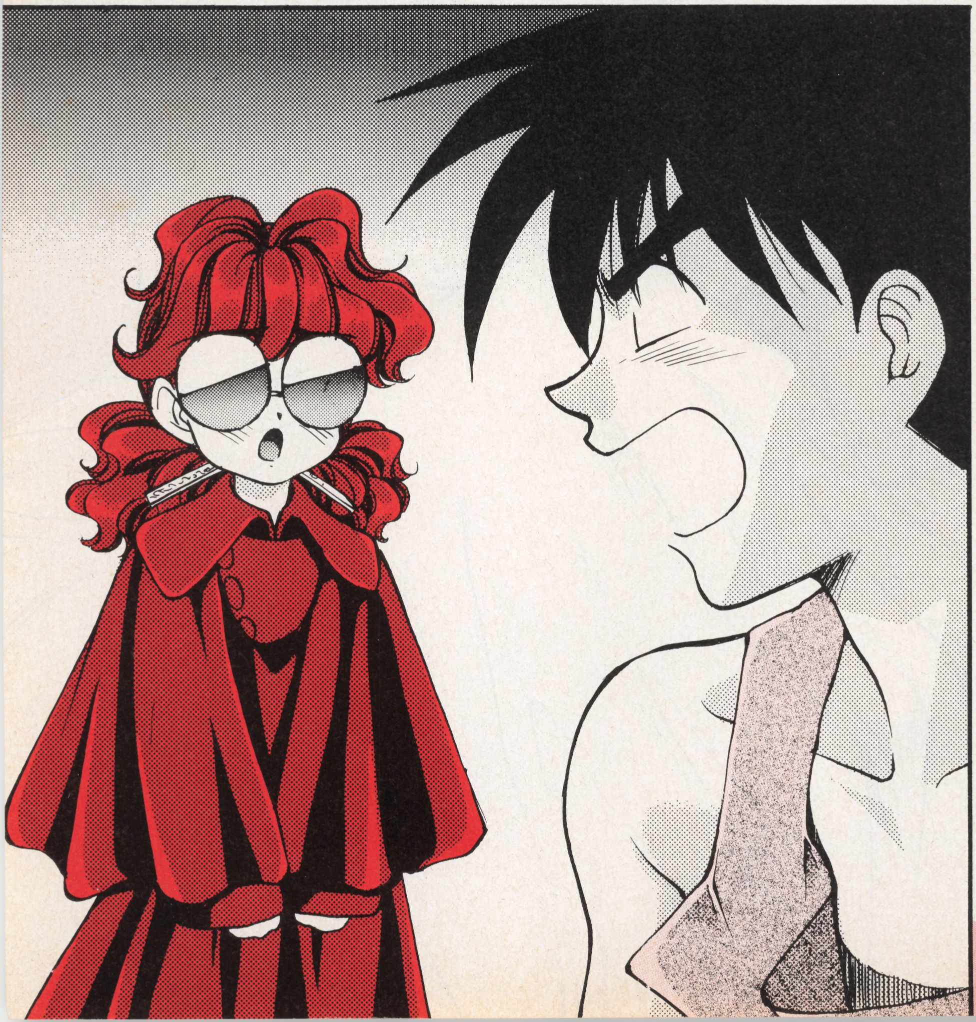
ドアが小さくノックされる。
「……どうぞ」
「あ、あの……」
入ってきたのはティラだった。
「あ……」
キャロットはティラを見て、すぐに顔をそむけてしまう。
「…………」
ティラの顔が悲しそうな表情に変わった。
「あ、あの、マロンちゃんは……？」
「……大丈夫だ。死にゃしねえってさ」
キャロットはティラのほうを向こうとはせず、ぶっきらぼうに言う。
その言葉を聞き、ティラは一瞬、安堵(あんど)したような表情を見せた。が、その顔はすぐに曇る。
原因はすべてキャロットの態度にあった。
キャロットはまだティラのほうを向かないのだ。
「あの、キャロ……」
「…………」
「キャロってば」
「…………」
「こっちを向いてくださいまし」
「……なんだよ」
ようやくキャロットはティラのほうを向いた。
が、向いた瞬間、ドキッと大きく心臓が震える。
それほどティラが悲しそうな、寂しそうな顔をしていたのだ。
「怒ってるんですの、キャロ？」
「別に……」
「怒ってるんですわね、キャロ!?」
「怒ってないって……」
「ウソ。怒ってます！」
「怒ってねえって言ってるだろっ！」
思わずキャロットは大きな声を出していた。
が、すぐに慌ててマロンのほうを見る。
マロンは目覚めた様子はなかった。
「と、ともかくだ。怒っちゃいねえから……」
ボルテージを下げてキャロットが言った。
が、顔はいまだに実に不機嫌そうであった。
「キャロ……」
「怒ってるとしたら、おまえじゃねえよ！

爆れつ場外乱暴!!　さて、スゲーところからのダジャレを紹介するぞ。「銅像がどこにあるかドーゾ教えてください」メディアワークス雑誌編集部・部長S　オイオイ部長だぜ、部長。まったく大丈夫かねこの会社。お使いにでたバイト君の本当にあったセリフらしいけど…。まあ、部長でもこんなもんだから、みんな気楽にな。

あの失礼なスカした野郎に対してだ！」
「……エンゼルのことですわね」
「なにが〝天使〟だ！　あんなヤツ、堕天使で十分じゃいっ！」
キャロットの剣幕は相当なものだ。
ティラは複雑な気持ちだった。
キャロットが怒っているのは、例のエンゼルの宣言が原因らしい。となれば、その理由はいよいよ嫉妬——
それはティラにとって非常に嬉しいことだ。
が、キャロットがエンゼルのことを悪く言うことはティラにとって心が痛んだ。
（エンゼルは決して悪い人ではありませんわ……）
そう言えばいいのだが、そうなるとキャロットの機嫌がもっと悪くなるかもしれない。
ティラは妙に臆病になっていた。
「ティラ、おまえ、あいつと付き合うのか!?」
「えっ……!?」
少し考え込んでボーッとなっていたティラが気づくと、キャロットがこちらをにらんでいた。
「だから、あいつと付き合うのかと聞いてるんだよ！」
「…………」
ティラはすぐに返事ができなかった。
（あたしが好きなのは……）
もちろん、考えれば答えはノーに決まっている。
だが、それをすぐに口に出せなかったのは、エンゼルの優しげな笑みが頭に浮かんだからだ。自分といるときだけ見せる、あの優しげな笑み——
そこにはどこか寂しげな気持ちが含まれていた。
ティラは、そんなエンゼルをそう簡単に見捨てることができないのだ。
ティラの返事がないことで、キャロはさらにいらついていた。
「行けよ……」
キャロットがすねた調子で言った。
「いいから、あいつの所に行っちまえ」
「えっ!?」
「だから、あいつのことが好きなんだろ!?」
「エンゼルと付き合うなんてひと言も言ってませんわ」
「…………」
「キャロ、なにをそんなに怒ってるんですの？」



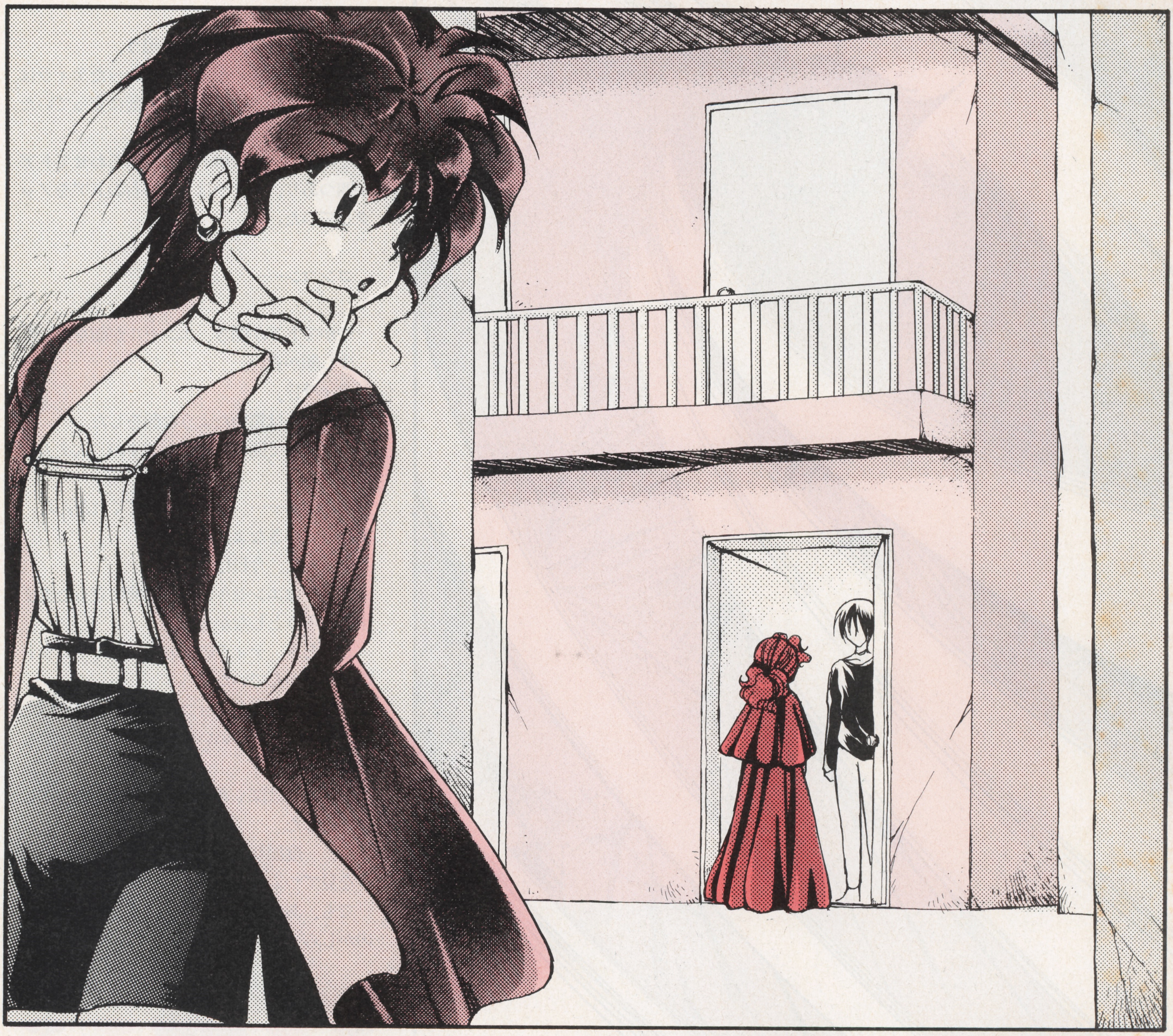
少し強い調子でティラに言われ、キャロットは唇をかみしめた。
さらに腹を立てたかというとそうではない。いや、そうかもしれないが、さっきまでの腹の立て方とは違う。
（まったくその通りだ……）
キャロットは思っていた。
（いったいオレはなんでこんなに腹立ててるんだ？　これじゃあ、まるでオレがティラのことを好きみたいじゃんか！）
キャロットの怒りはだんだんと自分に向かい始めていた。
自己嫌悪――
自分が実にいやなヤツに思えてくる。
それでまたさらに腹が立ってきてしまっていた。
悪循環だ。
「…………」
キャロットはまたプイッと横を向いて、ティラから視線を離した。
「…………」
今度はティラもなにも言わなかった。
（今はなにを話しても無駄ですわ……）
ティラはそのままペコリとマロンのほうに頭を下げると、部屋から出ていった。
「ちぇっ……」
ティラが出ていってしばらくして、キャロットが舌打ちをした。
その舌打ちは果たして誰に向けられたものか。ティラか、エンゼルか、はたまた自分か――
「兄さん」
いつの間にかマロンが目を開け、キャロットを見つめていた。
「マロン、起きちまったか。わりぃ」
「……ずっと起きてたよ。兄さんの声は大きいからね」
「……そっか」
しばし二人の間に沈黙が訪れる。
やがてマロンが再び口を開いた。
「今の兄さんの態度、あんまりよくないよ」
「…………」
マロンの言葉にキャロットはなにも答えなかった。



5

キンコ～ン……キンコ～ン……

ティラはエンゼルの通う服飾デザインの学校の前にいた。
よく考えてみれば、ティラがエンゼルに会うためには、そこで待ち受けるか、エンゼルのほうから訪ねてくるのを待つしかなかったのだ。
ティラはエンゼルの家がどこにあるのか知らなかった。
「…………」
学校の門の前に立つティラを、学校から出てきた者たちが好奇な目で見つめていく。
ティラの赤い服はそういう意味では目立った。
が、いつまでたってもエンゼルは出てこなかった。
終業の鐘が鳴ってからずいぶん経つ。
（おかしいですわ……）
思いあまって、ティラはちょうど出てきた講師らしい人物に話しかけた。
「あの～、すいません。こちらにエンゼルさんという方はいらっしゃらないでしょうか？」
ティラが声をかけた人物は、ティラをまじまじと見つめていた。
「あ、あの……？」
興味深げに自分を見るその人物の視線に対し、ティラは不審さを顔に出した。
相手はそれに気づいたようだ。
「これは失敬。ボクはこの学園の講師を務めるオガタという者だ。ジロジロ見たりしてすまなかった」
「あ、いえ、別にあやまってもらわなくとも……」
「エンゼルについてだったね。……そうか、キミがあのエンゼルの……」
「はあ？」
一人納得したようにうなずくオガタは、あのエンゼルのデザイン画をほめた講師だった。
オガタは、かのデザイン画に描かれた少女とティラをだぶらせていた。そして、それは正しかったわけだが。
「エンゼルに会いに来たのかな？」
「は、はい」
「あいにくエンゼルは今日は休んでるよ」
「えっ!?」



「家ならこの近くだ。教えてあげよう」
　エンゼルの家までの道順を聞くと、ティラは深々と頭を下げて、その場から歩き出そうとした。
　が、そのティラにもう一度オガタが声をかけた。
「あ、キミ」
「はい？」
「キミのおかげでエンゼルのデザインはどんどんよくなっている。……ありがとう」
「……？　……それって？」
「デザインにも愛が必要だってことさ」
　オガタはウインクすると、先に歩き去っていった。
「愛……？」
　思わぬ言葉に、ティラはしばらくの間、その場に呆然（ぼうぜん）と立ちつくしていた。

6

　その日、偶然というべきか、ショコラはブティックが軒（のき）を連ねるベルサー街に来ていた。
　そう、あの服飾デザインの学校のあるところだというのは、言うまでもない。
　心配されたマロンの傷は大事には至らなかったし、フィッシュ一族もとりあえずは撤退したし——というわけで、空いた時間を利用してやって来たのだ。
「えへへ。ちょっとエッチな服を買って、ダーリンを悩殺しちゃおっかなぁ」
　かなりノーテンキな気分でショコラはウインドウショッピングを楽しんでいた。
　が、その足が止まる。
「あら？」
　見慣れた赤い服が少し前を横切っていったのだ。
「ティラじゃないの？　ティラ！」
　声をかけたが、ティラは気づいていなかっ



た。
　思わずショコラはあとを追う。
　建物の間の細い道に入っていったティラは、二階建ての小さなアパートの前に立っていた。
（あの子、いったい？）
　そのアパートには一階と二階あわせてドアが四つあり、ティラは一階の右のドアをノックしていた。

　コンコン……

　やがてドアが開き、エンゼルが顔を出した。
　少し顔が青い。
「ティラ!?」
　エンゼルは驚いたような顔をした。
「病気だって聞いて来たんですの。大丈夫ですか？」
「あ、ああ……。せっかく来てくれたんだ。上がっていきなよ。」
「……いえ、今日は……」
　ティラはエンゼルの部屋の前に立ったまま中に入ろうとしなかった。
　このとき、ティラの頭の中にはキャロットの顔が浮かんでいた。
　一連の出来事をショコラがじっと見ていた。
「へ〜、なかなかいい男じゃない。ティラもやるもんね」
　ショコラは深く考えず、その場をあとにしようとした。
　が、一度振り返って、エンゼルの部屋のほうを見てつぶやいた。
「でも、あの子、ダーリンのことあきらめたのかしら」

7

　ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！
　ザワワァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァッ！

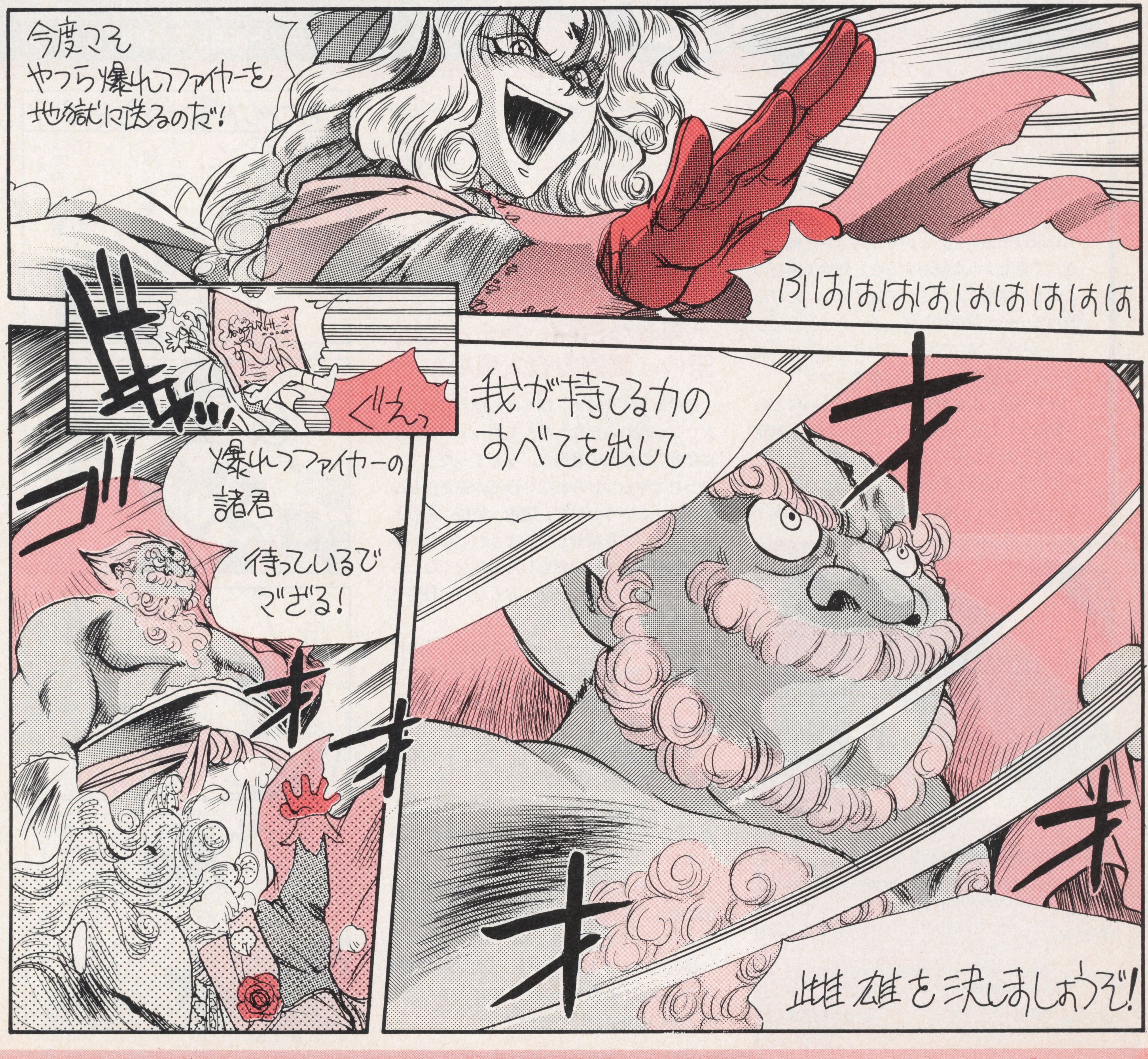
　黒雲がたなびき、木々が強い風に悲鳴をあげる。
「復活でござるっ！」
　台風魔術師ハリケーンがその中に立っていた。
　肩にかついだ袋は見事に直っている。いや、むしろ前の袋よりも大きい。
　ゼリーがハリケーンを前にして叫んだ。

「ハリケーンよ、今度は大丈夫だろうな！」
「我が魔力は、当社比100パーセントアップいたしもうした。次は200パーセント勝てるでござる！」
ハリケーンが自信満々で力強く言う。
ゼリーが満足げにうなずいた。
「今度こそ、やつら爆れつファイヤーを地獄に送るのだ！　ふははははははははははははははははははははっ！」
ゼリーの高笑いが風に乗って、あたりに拡散する。

ドカッ！

さらに身を乗り出してなにかを言おうとしたゼリーだが、その顔にどこから飛んできたのか、看板が直撃していた。
「ぐぇっ……」
おバカはその場でのびてしまう。
だが、台風魔術師の脅威は変わらないのだった。
「爆れつファイヤーの諸君、待っているでござる！　我が持てる力のすべてを出して、雌雄を決しましょうぞ！」
シリーズ始まって以来の強敵を迎え、果たして、マロンをケガで欠いた爆れつファイヤーに勝ち目はあるのか!?

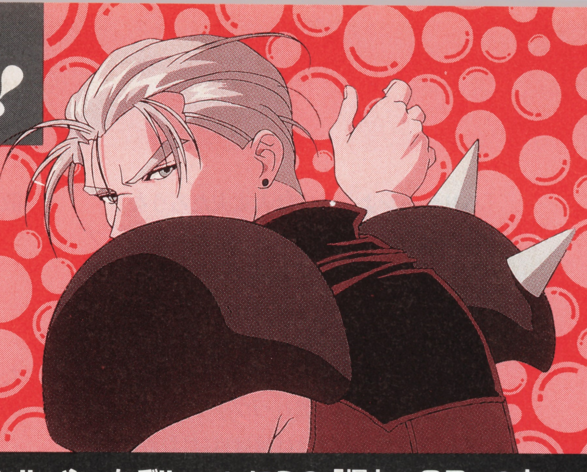
≪続く≫



最後は岡山県・ダジャレもんの作品。「“マサチューセッツ工科大で何を勉強するの？”“摩擦熱効果じゃい!!”」　まさに「つまら〜ん！バシッあうっ!!」って感じだな。まあそこはかとなく感じさせるアカデミックさというか、男らしさというか(何が？)が掲載の理由かな……。おいみんな、来月こそ頼むぞ!!

MONTHLY DENGEKI BOMB!

月刊 電撃 爆



うぉい!! やったぞ!! ついにこの「爆れつSP」の文庫発売が決定したぞ。TVアニメのオンエアに続いて、こうやって毎月嬉しいニュースが届くのも、全部みんなのおかげだよな。ホント感謝してるぜ!!

「爆れつSP」文庫発売決定。発売予定は96年1月だ!!

うぃーす！ 元気にしてっか〜、あっかほりどぅぇ〜す!!…とイカン、イカン。なんか本当に最近キャロ化、というか古本新之輔化が進んできたような気がするな。知性で勝負のこのオレ様がこんなことではイカン。んじゃ改めて……、元気にしてっかー!? ○○○してっか〜!? んでもって×××××か〜!? ……ってお約束ギャグばっかでスマン。

さて本題。上にも記した通り、ついにこの「爆れつハンターSPECIAL」の文庫発売予定がたったぞ。もちろん文庫化にともなって序章・転章と書き足し、臣士さんのとっておきのカラー口絵も満載の、ウハウハ本。一気に読むと、書き足し分のイメージと相まって、連載時とはまたひと味違った「爆れつSP」となるはずだ。よ〜しみんな、絶対に買うべし!!

といったところでCMは終わりにして、今月も怪人さんの制作者のご紹介といこうか。今月の怪人さんを考えてくれたのは、鳥取県のペンネーム、オープンリーチだ。

「爆れつSP」始まって以来の、超強力怪人登場!!

連載も半年を越え、ぼちぼち怪人にパワーダウンが現れるかな〜なんて思っていた矢先に超強力な怪人の登場だ。なんてったって、ひと月でやっつけられないほどの強さだもんな(笑)。というわけで、魔術、特技、弱点ともに、すべてを紹介してしまうわけにはいかないけど（来月号のおもしろさがなくなっちゃう)、オープンリーチは、おもしろい設定をたくさん考えてくれたぞ。

アイデア採用のキーになったのは、その性格設定。「律儀な悪者」という設定が、今までにはない形で目を引いた。もちろん風を操る魔法やその風貌など、敵キャラに使いたくなる理由は他にもあったけど、なんといっても「律儀な悪者」(笑)。なんかウソのつけない詐欺師、みたいなパラドックスを感じてしまうよな。オープンリーチよ、次作も期待しているぞ。

さて、そうなると来月の怪人はどうするか微妙なところだけど、次号にチャンスがないからといって応募をさぼらないように。ダブル怪人でいくかもしれないし、再来月に採用となるかもしれないからな。継続こそ力、次号も熱い投稿を待ってるぜ!!



- 名前▶ 台風魔術師ハリケーン
- 魔術▶ 風を自在に操る袋を持ち、局所的な台風を起こすことができる。そして……。
- 特技▶ 錐もみ状の風を作り出し、その鋭利な風圧で敵を傷つけるワザを持っている。
- 弱点▶ 風を操る袋が大きな武器であるが、逆にそれを取られると何もできない怪人。
- 制作▶ 鳥取県・オープンリーチ 「嵐のように麻雀で勝つ友人を見ていて考えました…憎い」



4コマ 奥谷かひろ

メール オブ 爆



▲神奈川県・桜木かずきさん まだまだこれから。お楽しみに。



▶神奈川県・天津甘栗さん これからお話は佳境へと向かうからね。



▶愛知県・水原ひらりさん なんとなく愛嬌のあるキャロットだなあ。



▲埼玉県・がん助さん TVアニメのOPとEDは本当に人気が高い!!



▶栃木県・葵あさぎさん いつもおハガキありがとう。



▶岐阜県・柴ゆかりさん エンゼルへの転び注意報発令中（笑）。

どうしても月刊誌のスケジュールだと、みんなのハガキをしめ切りに間に合わせるのが大変になってしまうのだ。
でも、ひと月遅れでもチャンスはチャンス。出したハガキがすぐ載らないからといって、諦めちゃわないようにな。

2誌連合企画



話題沸騰!! 爆れつ三大賞

さっそくたくさんの応募の始まったこの「爆れつ三大賞」。特に応募の反応が早かったのは「爆れつボイス大賞」だったようだ。でもしめ切りはまだまだ先。「爆れつ４コマ大賞」も「爆れつコスプレ大賞」も、キミの応募を待っている。

作家、声優への登竜門!? 三大賞への応募続々と!!

先月号での発表と同時に、たくさんの応募が始まったこの「爆れつ三大賞」。あらためてその概要を説明すると、

爆れつ４コマ大賞……爆れつのキャラを使った、４コママンガを募集する懸賞。Ｂ４サイズの画用紙かケント紙に黒インクか墨汁で描き、４本以上を１セットとして応募する。

爆れつコスプレ大賞……爆れつのキャラのコスチュームプレイヤーを募集する懸賞。コスプレした自分のカラー写真を３カット（正面、横、後ろ姿）撮影し応募する（本人の応募でない場合は、必ず本人の捺印された同意書を同封のこと）。

爆れつボイス大賞……発売中の「爆れつハンターＣＤ」シリーズの中から好きな曲を選んで（ＴＶアニメの曲でも可）、それを歌ってカセットテープに録音し、応募する懸賞。

という、一見オチャラケ実は大マジメな懸賞企画なのだ。

▼電撃ＰＣエンジン編集部としては、ガトーのコスプレなんかが楽しくていい…、なんて冗談みたいな応募ももちろん可。



もちろん各賞には副賞として賞金も授与！

それぞれの大賞への応募作品・応募者は、厳正な審査（オーディション）によって選考され、大賞以下各賞に選ばれた作品・応募者には、副賞として賞金や様々な特典が与えられることになっている。

また審査員には、原作者のあかほりさんを始め、各誌編集長や大手レコード会社プロデューサー、そしてレギュラー声優陣などを予定しているので、単なる作品のファンとしての参加も楽しく、またプロを目指す人たちにとっても有意義な大賞となるはずだ。



▶次のあかほり作品では、キミがキャラクターボイスとして登場する!?

各賞ともしめ切りは96年２月28日（当日消印有効）。しめ切りまでの間に、１度この電撃ＰＣエンジン誌上と、兄弟誌電撃コミックガオ！誌上で応募状況を途中発表し、最終結果は、96年４月発売の両誌で発表となる。

作家への道、声優への道、そしてタレントへの道を目指すのか、それともお祭り感覚でイベントを楽しむかはキミ次第。まずは気楽に各賞に応募してみよう。

爆れつ三大賞のオキテ

各賞のあて先は、〒101 東京都 千代田区神田駿河台１－８ 東京ＹＷＣＡ会館 ㈱メディアワークス「爆れつ○○大賞」係（○○の所に各賞のタイトルを入れて応募してください）。しめ切りは２月28日（当日消印有効）、発表は４月発売の電撃ＰＣエンジン及び電撃コミックガオ！で行います。なお、受賞されました作品の著作権（出版権、映像化権、その他副次商品化権を含む）は、株式会社メディアワークスに帰属します。



読み斬る覚悟はあるか。
自信作・話題作満載の「電撃」のコミックスラインナップ
絶賛発売中
定価560円
漢の血が沸る!
新・将門伝説が、今始まる!!
将星ノ門①
しょうせいのもん
藤澤勇希
「月刊 電撃コミックガオ!」(毎月27日発売)にて、好評連載中!!
犯人を探せ! 名探偵(?)アリスが大活躍!!
NHK教育 天才てれびくん
アリス探偵局
消えた自転車の巻・赤い数字のなぞの巻
作画/吉富昭仁 脚本/ひのくまりこう トリック原案/藤原宰太郎
絶賛発売中 定価580円
©NHKソフトウェア
バーチャル世界を舞台に大冒険。大人気アニメがコミック化!
NHK教育 天才てれびくん
恐竜惑星①②(完)
吉富昭仁
絶賛発売中 定価各480円
「炎帝」を巡って戦いの火蓋が切って落とされる! 番外編を収録した待望の最新刊!!
魔狼王烈風伝⑤
沢田 翔 12月10日発売 定価1,000円
単行本①～④巻も絶賛発売中! 定価各1,000円
「月刊 電撃コミックガオ!」(毎月27日発売)にて、好評連載中!!
神々の地、クリスタニアへ…。今、若き冒険者たちの旅が始まる!!
レジェンド・オブ・クリスタニア①
はじまりの冒検者たち
原作/水野 良 作画/姫川 明 with HIURI PRO
12月10日発売 定価980円
「月刊 電撃コミックガオ!」(毎月27日発売)にて、好評連載中!!
極道くんVS極道うさぎ?小説オリジナルスタッフによる初のコミック化!!
極道くん漫遊記 THE COMIC①
原作/中村うさぎ 作画/桐嶋たける
12月10日発売 定価880円
「コミック電撃大王」(季刊1・4・7・10月18日発売)にて、好評連載中!
世に巨悪甦るとき、再び覇王丸が燃え上がる
天下無敵のサムライ伝説堂々登場!
聖剣士伝説
サムライスピリッツ
真行寺たつや
12月27日発売 定価880円
©SNK1994 ©SNK・フジテレビ・NAS
いよいよSFC用ゲームソフト発売間近! とどまるところを知らぬ最強の転生幼稚園児たちは今日も行く!!
幼稚園戦記 まだら④
義見依久 with MADARA PROJECT
12月10日発売 定価680円
※価格はすべて税込みです
発行●メディアワークス 発売●主婦の友社
お問い合せ▶03・3294・1130(主婦の友社営業部)
内容に関するご質問▶03・5281・5213(メディアワークスコミック編集部)